

# 「比較文化方法論実習Ⅰ」 『茶と書における日中文化比較』実践報告

中山 文<sup>\*</sup>，青山由起子<sup>\*\*</sup>，諸泉 聡子<sup>\*\* \*\*</sup>

(2010年1月7日受理)

## はじめに

中山 文

2006年に行われた人文学部の学科編成に伴い、筆者は歴史文化コースの配属になった。本コースは他大学の歴史学科のように歴史の専門家が集まる場所ではない。「歴史は過去の暗記ではない」をモットーに、歴史を時間の縦軸と空間の横軸でとらえた授業を行う。スタッフは歴史学の専門家3名と比較文化の視点から歴史を考えようという外国文学・文化の専門家3名で構成されている。日本・中国・ヨーロッパの歴史をフィールドとし、過去の営みから生活・習慣・考え方・経済などを総合的に学修し、現代社会を深く分析し、確かな方向性を持って未来を拓く力を育むことを目標としている。

本コース開設時、この目標達成のために実習科目を設定することになった。そこでは座学を専門とする専任スタッフには教えることのできない実践のプロを招くことにした。文化を体感する喜びを学生に教えてもらいたいと考えたのである。例えば茶道、料理、歌、絵画など、自分が過去の伝統とつながることを知り、そのことで今後の人生をより広く深く楽しむことができる。そんなきっかけとなる授業をしてほしかった。

だが、それらは市中の「カルチャーセンター」や「〇〇教室」の授業ではない。大学教育足りうる文化的教養に裏付けされている必要がある。どこにそのような授業を担当できる先生がいるのだろうか？我々は非常勤講師探しに奔走した。

筆者が担当したのは比較文化方法論実習Ⅰという2回生後期用の授業である。日中比較をテーマに考えて、「茶」と「書」が思い浮かんだ。結局中国文学の大家で本学の同僚でもあった一海知義先生に相談し、適任の方をご紹介いただいた。諸泉先生は煎茶「日本礼道小笠原流煎茶」の副家元で、中国文学の修士号を取得されている。青山先生は「明治維新における公文書書体の転換とそのメカニズムー視覚メディアとしての公文書書体ー」で博士号を取得されている。授業自体が初めての試みなので、こちらの趣旨をお話しし、授業運営はすべてお2人にお任せした。

以下はそのお2人の3年間の奮闘の記録である。

---

\* 神戸学院大学人文学部教授 \*\* 神戸学院大学人文学部非常勤講師  
\*\*\* 華道専正池坊、日本礼道小笠原流煎茶副家元

## I. 実習の形態

青山由起子・諸泉聡子

本実習「比較文化方法論実習Ⅰ」は「茶と書」という副タイトルを持つ。「茶」の実習担当者（諸泉）と「書」の担当者（青山）の2人が協力して実習を進める。担当者ごとに約20名の学生が所属するので、①と②の2グループが存在し、合計約40名である。ここに毎年留学生の体験参加が2~5名ほど加わる。

本実習3年目の現在、授業回数は半期全14回であるが、初めの2回と終わりの2回に、①と②のグループが合同で実習を行った。残りの10回は①と②は別々になり、「茶」と「書」の実習を各5回ずつ行った。グループ①は「書」（青山）→「茶」（諸泉）と進み、グループ②は「茶」（諸泉）→「書」（青山）と進む。

全14回の実習内容は以下の通りである。「茶」と「書」の各実習は各担当ごとに後述するので、ここでは合同実習のみ内容を記す。

第1回目：授業形態や準備物などのガイダンスを行い、各担当が全員に教育資料のためのアンケートをとる。

第2回目：「茶」と「書」の実習を受けるにあたっての基礎知識を、担当ごとに概説する。（パワーポイント使用、各30分）

第3~12回目：グループ別に「茶」と「書」の実習

第13回目・第14回目：まとめの茶会を楽しむ。茶席の準備や後始末を含め、2グループが茶会の主・客を交替しながら「茶と書」の茶会を企画・体験する。

## II. 「茶」の実習から

諸泉 聡子

### 1. 「茶」実習授業の目的

日本には、茶の湯文化、煎茶文化がある。茶道といえば、茶の湯というのが一般常識である。実際にオリエンテーションで実施したアンケートで、煎茶文化を知っていた学生はわずか数名であった。

煎茶とは、茶葉を淹茶方式で喫する茶で、文人茶とも呼ばれる。江戸後期に始まった。当時、日本の知識階級の人々は、中国の主として明時代の文人たちの文化に憧れた。特に、喫茶文化は日本でも、比較的实践可能な分野であったため、人々はこの新しい喫茶方法に惹かれた。中国の茶葉を手に入れ、中国の茶道具で喫するのは最高の贅沢であった。そうして仲間で中国の書画や音楽を愛でながら、楽しい時間を過ごすのは、当時でいえば文化の最先端を味わうことであった。『雨月物語』で有名な国学者上田秋成も、「あしかひのこと葉」に中国の茶と出会った感動を随筆に残しているし、煎茶書『清風瑣言』を上梓するまでに煎茶に傾倒した。

煎茶は茶の湯に比すれば、現在でも中国風のしつらえを残している。文人茶というくらいだから、中国文人の象徴である文房四宝を飾ることもある。現在でも、茶道具で最高に

品格があるとされるのは、古く中国から渡ってきたものである。このように、煎茶は、中国茶文化の影響が顕著でありながら、日本独特の茶文化へ発達している。

「茶」の授業では、煎茶の実習を通して、日中両国の茶文化に対する理解を深めるとともに、日本独特の茶文化の良さを理解・体得することを目的に進めた。

以下はシラバスに挙げた実習5回分のテーマと内容である。④は主に和菓子の季節感や見立てについて、⑤は日本の生け花の歴史文化に触れるなど、内容に少々の変更を加えた。



学生茶会のしつらえ

#### ① < 喫茶のながれ >

簡単な中国における茶文化の変遷をたどり、日本にどのような影響を与えたか考察する。実際に茶葉を観察し、茶を淹れ味や香りの違いを楽しみ日・中の喫茶文化について考える。

#### ② < 文人趣味の喫茶 中国 >

中国の明時代には書画骨董を愛で、茶を喫し花を愛する人々がいた。文人と呼ばれるその人物達によって喫茶趣味は多彩な意味を帯び、独自の文化が育かれた。その世界の住人になったつもりで香り高い中国茶を優雅に淹れ、喫する。

#### ③ < 文人趣味の喫茶 日本 >

日本、江戸後期。中国の文人趣味に憧れる人々は、中国明代の喫茶法「煎茶」に魅了された。日本において「煎茶」がどのように実践されたのかを探り自分で体験する。実際に煎茶を美味しく優雅に淹れ、喫して日本における煎茶の変容を探る。

#### ④ < 銘と謎語画題について >

茶会では菓子は菓銘、茶は茶銘と本来の商品以外の名称がつかわれる。これは日本独特のもの。そして床にいけられた花にはそれぞれの趣向で意味づけがなされる。松と薔薇ならば「不老長春」など。これは中国から伝わったもの。これらが渾然一体となったのが、日本の茶席である。菓子の選び方、銘のつけ方、いただき方を学び、床の花についての知識を養う。中国茶を優雅に淹れ喫し、茶会に向けて練習を行う。

#### ⑤ < 花のある風景 >

茶の世界では茶席には花が欠かせない。掛幅(軸)と花で茶席のテーマを表すことが多い。煎茶席の花は、江戸時代中国より伝来した『瓶史』という書籍の影響を受けている。花はその背景にある山の風景を感じたり心を遊ばせる装置といえる。自分で花をいけて、茶を喫する。茶会に向けて練習も行う。

## 2. 授業の形態

### ① 予備知識の習得

実習を始める前に、茶文化についての簡単な説明を15分~20分程度、レジュメを配布

した上で、スライドを交えて説明した。知識を得てから実習を行えば、より実習の意味について考察が深まると考えたからである。茶文化については、日中両国の茶文化の歴史を簡単に説明した。茶の説明のみならず、茶文化にまつわる、いけ花（茶花）・和菓子といったいわゆる「和」の文化の理解も深めてもらいたいと考え、全般的に説明をした。



茶道具一組

## ② 体験学習－実習

すべての学生が、煎茶を体験できるよう、2人一組で茶を淹れられるようにした。日本礼道小笠原流煎茶の方式に則り、亭主（茶を淹れる人）、客（茶をいただく人）を交代で体験し、学習する。

形式は立礼。教室備え付けの机と椅子を利用。茶は最初の2回が台湾の中国茶。3回は宇治田原産の日本茶（玉露）、菓子は、毎回和菓子店に依頼して持参した。

茶道具は、20名の場合、10組の煎茶道具を用意した。内容は、以下の通り。

急須10個、茶碗3個×10組、茶托3個×10組、瓶掛10個、瓶敷10枚、湯沸10個、点盆（角盆）10枚、茶布敷10枚、茶合10、茶入10個、湯冷10個、建水10個、茶巾10枚、盆金10枚、巾筒10個、菓子器10個、菓子箸10膳、菓子20個、黒文字（菓子切り）20本、布巾10枚。

## ③ 授業の進行

第1回目、3回目を例に授業の進行を紹介する。

第1回目、授業約2時間前から、道具の設置準備。授業開始後、中国における茶の歴史を、レジュメを配布した上で、スライドを交え、説明する。その後、湯を湯沸に注ぐなど、準備を学生の手で完成させてから、実際に茶を淹れる練習を開始。2人一組になってもらう。主/客は対面するように椅子を置く。まずは、亭主役の学生の挨拶から始める。主客ともに挨拶を交わすことから始める。姿勢・お辞儀の仕方や、「本日はお招きいただきまして有り難うございます」等、挨拶の言葉を必ず言ってもらう。挨拶の際の姿勢、お辞儀の仕方、アイコンタクト、挨拶の内容、お辞儀をするタイミングを説明し、全員で挨拶を終えて、着席。挨拶も点前も、全員同時進行で、同じ動作をしてもらう。

最初の第1回は、模範点前を生徒の前で行う。動作の順序や説明を口頭でしながら、模範点前の動作を追う学生の動きを確認する。

煎茶にも点前があり、定められた一連の動作で茶を淹れる。茶碗をあたため、茶葉を急須に入れ、お湯を注ぐという単純作業も、合理的に定められた点前にしたがってすすめていけば、優雅な仕草となる。また単に見た目に美しいだけでなく、茶を美味しく淹れるための、法則が盛り込まれている。

第1回目は、中国茶を使用しての点前である。中国茶は熱湯で淹れて、香りをだす。蘭の花のように華やかな香りのする台湾産の茶を使用した。

ごちなく、動作を追う学生を確認しながら、間違えやすい箇所については、個別に指

導を行う。

茶にはお菓子 = 和菓子がつきものだが、それを懐紙に取るだけでも、作法がある。お菓子の取り方においては箸の扱い方を中心に、指導を行った。

煎茶は、一煎目と二煎目との間にお菓子をいただく。

点前が終了すれば、終わりのご挨拶をして、後片付けにはいる。後片付けは、箱の紐の結び方、道具のしまい方、等を指導しながら、おこなった。

日本独特の「道具を桐箱に収める」という発想。収め方にもルールが存在する。紙に包み、布に包んで、収めるとき、器の方向にも気をつけなければならない。特に、箱の紐の結び方は、興味を持って多くの学生が習得してくれた。

第1回目ということもあり、学生は緊張した面持ちで、一生懸命にお茶を淹れる。実際に初回の感想には、「緊張した」という感想が目立ち、「お茶を淹れるのに、こんなにドキドキするとは思いませんでした」等、初めて触れる茶の作法に新鮮な気持ちを感じたことが分かる。余裕のある学生は、味にも言及し、「茶の香りがいい」「何番目に淹れたかによっても味の違いがありました」「きちんとした点前ですと気持ちも良いです」等、興味を持って、取り組んでくれたようである。

第3回目からは、日本茶の代表、玉露を使用しての点前である。点前の前に、日本における茶文化の簡略史をレジュメを配布し、スライドを交えて説明する。いつ、中国文人趣味の影響を受けた煎茶文化が日本へ入ってきたのか、誰に好まれたのか、日本茶が開発されたか等の説明をする。

玉露は湯冷ましにいれることにより、お湯の温度を低めにして、ゆっくりと旨みをだす。日本のお茶らしい美しい翠色、味、器との調和が見られる。中国茶との違いを感じて欲しいと思った。

1回目と同様、玉露点前は初めてなので、前で模範点前をする。道具は、湯沸をかける瓶掛けを、ポットウオーマーに変える。湯を適温に冷ます「湯冷まし」という道具が新たに登場する。

基本的な動きは、中国茶を淹れるときと何ら変わらないので、学生も余裕をもって、点前をしているようであった。点前の概要が徐々に理解されてくると、より美しく点前ができるよう、こまかく丁寧に挙措を指導する。学生の間を見回りながら、個々に指導を行っていく。そ



指導風景（箱に収める）



展覧席（第一回学生茶会より）

れだけではなく、お辞儀なども根本的に、姿勢から徹底的に指導をする。

学生の感想には、点前についての言及が減り、お茶やお菓子そのものについての言及が多く見られた。おそらく点前を大体把握したので、個々に味わうゆとりができたのであろう。こちらとしては、日本茶の良さを理解してもらいたかったが、多くの学生が中国茶の方を好んだのには驚いた。玉露がとても美味しかった、というのは少数派であった。とはいえ、その少数派の中には、玉露のおいしさを的確に表現している生徒もおり、とても嬉しく感じた。

### 3. 指導の留意点

指導において、①知識の習得②挙措の体得③道具の扱い この3点を毎回意識した。

知識の習得については、少しでも興味を持ってもらえるように、プリントだけではなくビジュアルから訴えたほうがよいのでは、とスライドを用意した。しかし、あれもこれもと内容を欲張りすぎて、焦点がはっきりしない授業があった事は反省すべき点である。

また、煎茶文化のみに拘泥せず、日本文化全般において中国文化の影響を受けていることが多いので、いわゆる「和」文化と認知されている文化も中国文化が源流であることを、理解することを目的として、内容を構成した。

挙措の体得については、背筋を伸ばして姿勢を正すことを、しつこいくらいに何度も指導を行った。姿勢がきれいであれば、点前が少々間違ったとしても、目立たない。点前は、ラジオ体操のように、その都度、動作を言葉で説明しながら行った。授業の回数を重ねるにつれて、言葉を待たずに点前をすすめる学生も多く見られた。

道具の扱いについては、1つ1つの道具を丁寧に扱うこと、道具の説明や由来、なぜこの様に扱うのかという理由も説明した。理由を説明すれば、学生は理解し、丁寧に扱うことができるようになった。道具を大切に扱うことと、道具（器）に対する興味を育むことを目的とした。



留学生も意欲的

### 4. 教育効果

この実習授業を通して、どのような教育効果が見られたかを、学生の感想を中心に、見ていきたい。

茶への興味・・・「私は、中国茶のほうが苦みが少なく好き」「私は日本茶の方が渋みのほかに、旨み・甘みのバランスが良いなあと感じた。」「今日のお茶の2杯目がすごくおいしくて、“おいしいお茶”を飲むためには時間が必要なんだと思いました。」「初めて玉露を飲んでとても美味しいとおもいました。また自分で淹れたのでよけいに美味しいと思いました。」

和菓子への興味・・・「季節で和菓子の形などが変わっていて、日本人の季節を感じる

心は昔からすごかったんだと思います」

道具の扱い、箱の紐の結び方・・・「お茶もむずかしいけど、紐の結び方のほうが難しかった」

点前の意義・・・「一つ一つの動作に意志を通すことによって、とても優雅で綺麗な動作になることがわかった」

器への興味・・・「割らないようにするために大変緊張しましたが、柄が綺麗だなと思って見ていました」「こんなに

器に菓子が映えるとは。この取り合わせは、すごかったいい。こんな器、僕も欲しい。初めて、器というものに興味が出た。自分でも買おうと思う」

日本（茶）文化への理解・・・「何気なくのんでいるお茶や、お菓子にも歴史や物語があることが分かってよかった」「お茶はただのどをうるおすだけの飲料だけでしか考えてなかったが、この実習で、人とコミュニケーションをとる方法であり、日本文化の再認識でもあったと感じた」

茶を淹れて楽しむ意義・・・「いままで飲んだことがないような不思議なお茶でした。華やかな香りがして、すごく落ち着いた気持ちになりました。お茶を飲んでそんな気持ちになったのは初めてだったので驚きました。」「美味しい茶を淹れて、喜んでもらったらとても嬉しかった」

上記のように、学生たちは実習授業を通して多くのことを感じている。この新鮮な感想によって、指導する側ではあるが、教えてもらうことも多くあったと実感し、教育効果が十分に現れているように思う。

## 5. 茶と書である意義

### ① 教育効果発表の場—茶会

「茶」と「書」からみる比較文化方法論実習の最終の授業は、学生たちによる茶会である。授業最後の2回を、①グループは亭主側、②グループは客側というように分かれて、相手をもてなす。

初年度は、中国の文房四宝等（書青山担当）及び中国渡りものを中心とした煎茶具のしつらえを見てもらう展覧席、揮ごう席、煎茶席を開催した。

亭主側の男子学生はスーツ姿、女子も清々しい姿で臨んだ。

客側の生徒たちは展覧席を見学し、それぞれに盧仝「茶歌」の一節を揮ごうし、その後、茶席に移り、茶をいただくという形になった。亭主側の学生たち



紐の結び方



亭主側の男子学生

は、客側の学生たちが着席してから、茶席に入り、茶を淹れる。客側に中山教授を始めとする先生方やいつもと違う学生たちが入るため、亭主側は非常に緊張したようだが、いつもと違う良い雰囲気、良い経験になったとの感想が多く見られた。一番嬉しく思った感想は、「相手をおもって、一生懸命お茶を淹れて、おいしい、と言ってもらえてとても嬉しかった」という茶の本質のひとつを実感してもらえたことである。

## ② 「茶」と「書」である意義—茶会を通して実感したこと

煎茶をするものとしては、初めて行うのに、これ以上の茶会は望めぬほど、充実した茶会となった。なぜならば、煎茶は前にも述べたように、中国文人趣味の喫茶文化に憧れて始まったものである。理想は、中国の書画を始めとし古物を愛でながら、興が乗れば漢詩を詠んだり、揮ごうしたり、その揮ごうした作品を眺めてお茶を楽しみ、交友をあたためる、という姿である。この場では客側の学生たちにより「茶歌」が揮ごうされ、その後に茶席に移り、茶をいただくという、今日では、ほぼ理想とも言える形になった。

その素晴らしい茶会を神戸学院大学で経験することができた担当者は幸せであり、学生にとっても貴重な経験となっているのではないだろうか。それは「茶」と「書」という二つの分野からのアプローチがあったからこそ、行うことができたのだと思う。

## 6. 「茶」の実習のまとめにかえて

「家でも緑茶を飲む機会がふえました」「自分の経験として役立てていきたいと思っています」「現代日本できちんとした茶器と用具を使って、きちんとした作法で淹れる、というのはある意味新鮮で趣深くておもしろいものだった。また、やってみたいなと思った」「この授業を受けたことで、ゆったりとした時間を味わうこと、お茶を味わうこと、また一つ一つの動作を意識し美しくすることを学べたと思います。」という学生の感想をみるだけでも、実習の効果は十分にあると感じている。

日本の茶に対する興味から、茶に関わる文化、そして源流の中国文化へとその興味が広がり、日本文化への再認識へとつながればと思っている。

結局は、能動的な「気づき」「発見」から物事への興味は加速すると思う。

この実習が、学生たちの日中茶文化に対する「気づき」「発見」の一助となれば、幸せに思う。

## Ⅲ 「書」の実習から

青山由起子

### 1. 実習テーマを選択するにあたって

先述のごとく、本実習は、20人ずつの2グループに分かれて進められる。「茶」と「書」に分かれて受ける実習は、各々5回ずつにすぎない。

シラバスを策定する際に悩んだのは、たった5回だけの「書」の実習の中に、実習名の「比較文化方法論」という視点をどのように組み込むのかということであった。文化を比較す

るというだけなら、日本と中国の書の歴史や文化における異同を、実習によって体感させればよいであろう。ではその「方法論」と問われれば、今も確たる答えを見出し得ない。

もとより、「書」の文化を比較するのに、何々方法という方法論があるわけではないし、また、何々方法論を学ばせることが、本実習の主目的でもない。そのように理解し、ともかくは「書」の領域において、日中の文化を比較することのできる視点のいくつかを示すことで、その責を負うことにしたのである。

実習第1回目の合同ガイダンスでは、「書」と「茶」それぞれにいくつかの項目でアンケートを行う。これを3年間繰り返したが、その結果は常に、シラバス作成時点においてすでに予想していた通りであった。書道を習っているごく一部の学生を除いて、ほとんどは自分の字を下手だと思っており、日中書道史についての基礎知識はなく、また、小学校や中学校以来習字をする機会もなかったけれどなにか懐かしく、日本文化として学び直したい、という状況であった。つまるところ、本実習に対する大半の学生の認識は、「比較文化方法論」への期待というよりは「書の実習」というイメージであり、アンケートには「字が上手になりたい」という希望や「字が下手でもいいですか?」という愛おしい質問も毎回見られた。

実習にあたっては、そのような学生が臆することなく、かつ新鮮な気持ちで実習に取り組めるように配慮しなければならない。その上で、「このような視点に立つとこのような面白い文化の異同が見える」という素材を提示し、「なるほどと体感」させること、さらに欲張るなら、字の上手下手にかかわらぬ「墨書の楽しさ」を知ってもらいたい、この3点を教材選択の基本方針に据えた。したがって、選択した5つのテーマは、書道史や書道練習上の手順などの規制から完全に放たれている。以下は、3年間シラバスに挙げた「書」の5回分のテーマと内容説明文である。

#### ①<筆の持ち方あれこれ>

中国と日本では、筆の持ち方や練習法に違いがある。それらの古今のエピソードを学びながら、中国の筆の持ち方や練習法を体験し、日・中の相違がもたらす書への影響をさぐる。

#### ②<漢字から「いろは」へ>

文字を持たなかった日本の書の歴史は、中国の漢字を受容することに始まる。やがて日本人は、そこから仮名文字を創り出していく。その形成の課程を、毛筆で書いてたどってみよう。漢字から仮名への異同を、造形と筆触でとらえたい。

#### ③<連綿で書くマイ百人一首>

前回の発展として、日本独特の仮名美である「連綿(つづけ字)」と「散らし書き」を試みる。仮名の創出には、万葉集をはじめ和歌が深く関与しているが、ここでは「百人一首」を素材に作品を作る。

#### ④<和様と唐様のサイン>

江戸時代には、「御家流」とよばれる「和様」の書体と、「唐様」とよばれる中国風の書体が存在した。自分のサインをこの2つの書体で書き分け、書体が発す



マイ百人一首 (作品例)

る感性的な情報の違いに着目したい。

#### ⑤ < 茶席の書 >

茶席での「書」の役割は、決して小さくない。床飾りの一幅の墨跡で茶会のテーマを表すことができる。また、書画の鑑賞や揮ごうは、茶会に一層の文人趣味をかもし出す。茶会実習にむけて、鑑賞や揮ごうを体験しながら、「茶会の書」における日中文化の統合を考える。



唐様（左）と和様（右）（実習ノートより）

## 2. 「書」の実習例

毎回の実習に共通するのは、まずその時間のテーマを理解するための基礎知識を学び、その後実際に墨書するという流れである。テーマの理解のためには、実習ノートと呼ぶ解説プリントを用意した。時にはこのプリントに設けた作業欄に墨書させることもある。

以下に実習の例を概説するが、後の項で述べる2年目からの書道具の導入によって、実習の形態は順次熟成したと思われるので、ここでは3年目の実習の「書」①と②の2回の実習を中心に報告する。

#### ① < 筆の持ち方あれこれ >

(イ) 実習の開始は、書道具の荷解きから始める。紙や布で包まれた人数分の硯、文鎮、水滴（これは2人に1個）と墨、下敷きを、学生自身に梱包を解いてもらって種類分けする。どんな道具が出てくるかわからない。包みを解く時の期待感、書道具への興味を喚起し、観賞への入口となる。硯の大きさや重さ、石の色、模様、彫刻、また文鎮の動物の形などに小さな歓声があがる。そして各自が好みの硯・文鎮・水滴を選んで、初回に使用する書道具を机上に整える。

「茶」の初日の教室では、彼らは数々の道具が10組も並び、それが圧倒的な美しさで揃えられている光景に出会う。「書」の初日に各自に荷を解かせるのは、それとは対象的な道具との出会いを演出する意図をもつ。煎茶の道具に比して、書の道具は数が少なくてもすむので、このようなことが可能となる。ただし、後半に受け持つ「茶」→「書」のグループは包みを解く楽しみがないので、くじ引きなど何らかの道具選択の楽しみを設ける。

(ロ) 各自の机上に書道具が並べられると、机上の道具のいくつかを紹介し、人の道具も観賞させて、「文房四宝」の文化に言及する。

(ハ) その後、初めて各自持参の新品の小筆を書く姿勢で持たせ、まずはその筆を持つ自分の手の姿を、実習ノートにペンでデッサンさせる。続いて、日中の教科書などを参考に中国の伝統的な執筆法と日本のそれを比較し、日中間の異同を確認させる。また、自分の執筆法の種類を認



日本の執筆法例

識させ、筆を持つという簡単な行為にも、日中の歴史や文化が潜んでいることに気付かせる。

- (二) 実際に執筆法を変えて（中国の撥燈法と自分の持ちかた）自分の名前を楷書体で墨書し、その書きぶりの相違を実感させる。

手首を立てて筆軸を垂直にし、双鉤法（人差し指と中指の2本がけ）で持つ中国の執筆法は、単鉤法（人差し指1本がけ）で筆軸を寝かせるタイプの彼らにはかなり困難であったが、新しいことを試すという新鮮さを感じるようである。



中国の執筆法例

なお、墨書の前には、墨の磨り方と新しい小筆のおろし方（筆先の糊のほぐし方）を説明する必要がある。墨液の経験しかないものもいる。また小筆購入の説明の折に、そのまま持ってくることを指示しないと、穂の全部の糊をほぐして持ってくる必要があるので要注意である。

- (ホ) 最後に、道具の後始末の仕方を指導し、次回からは授業開始までに、各自好みの道具を机上に準備しておくよう指示する。

初回は指導内容が多いので時間が不足気味である。

② <漢字から「いろは」へ>

- (イ) 中国における漢字の創造から日本の漢字受容までの歴史は、第2回目の合同授業ですでに説明が済んでいる。ここでは、漢字の音（オン）を用いた日本語表記が、楷書・行書の万葉仮名から草書体の草仮名へ、さらに女手へと変化し、その字形を淘汰しながら字数を減少させ、やがて明治33年に48文字が選択され、それ以外の字は変体仮名として現存するに至った歴史を、実習ノートを用いて説明する。

- (ロ) 墨を磨って書く準備をする。変体仮名一覧表を見ながら、実習ノートの作業欄の表に「つき」「はる」などの単語を、現代平仮名の字母の漢字を用いた「万葉仮名（楷書・行書）」「草仮名（草書）」「平仮名（現在の平仮名）」の3種類で、また字母ではない漢字を用いた「変体仮名（草書）」で墨書させる。

- (ハ) 万葉仮名から平仮名へ、書くことを通して得た造形の違いや筆触についての感想を、実習ノートに墨書する。

- (ニ) テーマ外の練習として、行書体での署名の練習をする。担当者が各自の名前を行書体で墨書したカードを手本として渡す。

- (ホ) 道具を片づける。

- (ヘ) 次回に書く百人一首の絵札を各自1首選ぶ。

かぜ	うみ	はる	つき	
加世	宇美	波留	川幾	万葉仮名（男子）
加さ	宇美	はる	つぎ	草仮名（草書）
かせ	うみ	はる	つき	平仮名（女手）
う勢	ま見	えふ	ほ支	変体仮名（草書）

3. 漢字（万葉仮名・男子）から平仮名（草書）への変遷の過程を墨書している。

現代平仮名の字母を使って書く

母ではない変体仮名で書く

漢字から仮名へ（実習ノートより）

〔ハ〕の実習ノートの感想から]

- ・万葉仮名と平仮名だけで見ると違うように見えるけど、草仮名が間に入るとどう変わっていったのか、よくわかるなと思いました。
- ・3種類の仮名を書いていくうちに、だんだん平仮名に近づいていくのを実感しました。
- ・見るだけでなく、実際書くことでより理解できたと思います。
- ・いつも書いている平仮名が、意外な漢字からできていておもしろかったです。
- ・昔は字の数が多くて覚えるのが大変だったろうと思いました。
- ・万葉仮名は、ただ漢字の当て字という感じだが、草仮名に変化して今の平仮名っぽくなるものや、まだ遠い感じのものもあり、非常におもしろく思った。変体仮名は難しかった。
- ・少しずつ造形が柔らかくなっているのので、書いていてとても風流な気持ちになった。

漢字から平仮名へのテーマは、中国の文化を日本風に変容させていく過程を示すことのできる貴重な題材である。学生は（ロ）にある作業表を墨書で埋めることによって、中国の漢字が日本の平仮名になる変容の過程を、フィルムの早回しのごとく視覚的に捉え直すことができたようだ。

なお、最後の2回の合同実習は主客に分かれてのまとめの茶会である。「書」の実習としては、客側となる際に受付で挨拶し、それまで練習してきた行書体の署名を芳名録に墨書する。人前で筆を使って名前を書く緊張を味わうことになる。毎回誰かが「手が震えた」と言うので、「構わない。生きている証拠だ」と答える。また、本来なら席中であろうが、時間の配分上、茶席に入る前に席上揮ごうを行う。あらかじめ⑤の実習において、漢詩（「茶歌」 蘆全）の一節を色紙に墨書しておき、茶会当日は、展覧されている茶器を墨絵にし、雅印を押して作品を完成させる。煎茶席における文人の楽しみの体験である。中国風の趣のこの作品は、和様の百人一首の作品ともに茶会で展覧する。

### 3. 「古い書道具」の教育的効果について

5回の実習のテーマと題材は3年の間変えることはなかった。ただ大きく変化させたのは、「古い書道具」を導入したことである。その導入の経緯と、それによってもたらされた教育的効果についてここに記す。

1年目の実習では、「書」で使用する道具は筆ペン1本であった。たった5回の実習のために、もう手元には無いであろう小学生の習字道具を準備しなおさせるのはしのびなかったし、あえて準備させる教育的効果も感じられなかった。

筆ペンであれば、今後も利用可能である。ただ、なるべく本物の毛筆に近い毛先の回転や弾力を体感させるために、1本1本の毛が束になっているタイプを推薦した。学生に尋ねると、自分用の筆ペンを持っているのは、1人か2人である。筆ペンで書くこと自体が学生にとっては非日常的なのだから、書き味の工夫された今日の筆ペンなら、十分に筆の感覚を体感できるはずである。実際、ボールペンやマジックとの相違を自然に感じ取り、

筆で書くのは楽しいとの感想が聞かれた。

筆ペンは毛に安定した腰（弾力）がつけてあるので、少し慣れれば初心者でも筆先で細かい字を書ける。これを利用して、百人一首の札と同じ大きさの無地カードに、好きな一首を連綿で書き、絵も描いてマイ絵札の一枚を作らせることができた。

また、筆ペンは管理もしやすく、道具の準備にも片づけにも時間をとらない。筆ペンだけでも実習内容の消化は可能であった。書道具類の説明は①の実習でプリント写真によって示し、またまとめの茶会において展示物として観賞させた。本物の硯で毛筆を使用させたのは、芳名録などへの署名の練習と茶会本番の際に、こちらで書道用具を用意した時のみである。

しかし、2年目においては、各自に筆ペンと小筆を一本、毎回持参させた。そして担当者が所蔵する書道具を23組貸与することにした。導入の理由は、観賞に耐えうる書道具類が持つ教育的効果の可能性を確かめたかったからである。

書道具導入のきっかけは茶道具にある。「茶」では、「書」における筆ペンのように、道具を省いてペットボトルで済ませるわけにはいかない。「茶」を点てるいくつもの道具なくしては成り立たない。当然のこととしてその道具類を黙々と準備する共同担当者の姿に触発された形である。「茶」と「書」という二分野が共同する実習形態であったからこそ、その均衡をはかるべく書道具の導入に踏み切れたことを記しておきたい。

よく知られているように、「書」の文化には「文房四宝」という楽しみがある。硯・墨・筆・紙を四宝といい、それ以外にも文鎮や水滴や雅印など、机に乗る様々な文房具を愛玩する文化である。このことは実習の中で説明はしていたが、やはり実際にある程度観賞に耐えうる古い書道具に触れ、それを使用させるに勝るものはないのではないか。

幸いにして、担当者は古物を含む様々な石質や形の硯を人数分準備することができた。硯の他に数種類の小さな文鎮と水滴を加え、これを授業期間、実習の教室に保管させてもらった。学生には実習毎に自分の好きな取り合わせで使用してもらったのである。

ただし、2年目の実習においても、基本的には1年目同様に筆ペンを使用し、百人一首の作品も前年と同様に筆ペンを使用させた。硯で墨を磨って書くのは、授業の終わりに自分の名前を行書で練習する時と、茶会で作品を揮ごうする時だけであった。

3年目の実習では、書道具の使用を主体とした。筆ペンは準備させず、毛筆の小筆だけを使用し、書く作業は感想の記述でも、硯で墨を磨らせ、毛筆で書かせた。学生は始業前にその日に使いたい硯、文鎮、水滴を選び、これは同一品の下敷きと墨を机上に準備するのである。そして授業の終わりには各自で筆と硯を清めて片づける。なるべくいろんな硯や文鎮を使いなさいと指示したので、毎日が書道具との一期一会であった。

百人一首の作品については、小筆では極細字が難しいので、無地カードではなく短冊を横向きにして用い、仮名の短い連綿と散らし書きを体験させた。

今回「書」を先に実習した学生20人に、5回目を終えるにあたり「古い硯や文鎮を使って実習をしたことを、どんなふう思ったか正直に教えてほしい」と無記名で感想を書いてもらった。たくさんの感想を書いてもらえるよう、筆記用具はシャーペンである。そのいくつかを以下に記す。

- ・ 昔の硯や文鎮を使わせてもらったが、当時の雰囲気を感じることができて、すごく良い環境で書道の授業を受けることができた。
- ・ 古くから使われている道具を使うことで、緊張感が生まれ、気持ちの切り替えができた。「形から入る」というのも大切であり、学ぶ雰囲気としても充分だった。シャーペンの使いやすさを痛感した。



茶会での揮毫

- ・ 中国で使われていたものと同じ道具を使うというのは初めての経験でとても新鮮でした。
- ・ 書道を習っているのですが、いつも使っている硯とは全然違って、とても新鮮な気持ちで筆を持つことができました。
- ・ 昔の道具を見るのは結構おもしろかった。
- ・ 道具は毎回選ぶ楽しさがあり、その道具の使いやすさ、デザインなど、よく確かめることができ、楽しかったです。墨を磨るということもしたことがなくて、磨って使うということに対して、濃すぎたり薄すぎたり、自分で調節することができてよかったです。
- ・ 中国の古来の硯や文鎮を使用して書いたので、小学校の時にセットの硯と墨を使って書くのとは違い、気持ちが引き締まるような感じがした。道具はみな趣があり、使用できる機会が全くないので貴重な体験だった。
- ・ 墨汁ではなくて墨を磨って書いたので、改めて何か新鮮な感じでした。また、小学校で使っていたような道具ではなく、中国の昔ながらの道具を使うことによって、より一層書道をやっているという気持ちになれて良かったと思います。筆で書くというのも、渴筆など筆ペンでは味わえない風情があって良かったし、楽しかったです。
- ・ 毎回違う道具を選び、様々な種類のものを使うのはとても楽しかったです。日常でなかなか触れることのないものに触れるというのは、ある種の感動を覚えました。

この他にも、すべての学生が中国の古い書道具を使った体験を肯定的にとらえる感想を述べている。字を書くというだけではない「書」の楽しさを、彼らは各自の思いで感じ取ってくれたようだ。道具は時に担当者を超える教育的効果をもたらす。それは確かに道具と人との関係である。これらの感想は、古い書道具に触れることによって古美術の魅力を感じ



茶会での展覧

取り、彼らが「文房四宝」の世界を垣間見た証である。

#### 4. 「書」の実習のまとめにかえて

3年間の実習で、5回ごとの「書」のテーマを6回繰り返したことになる。担当者としては、繰り返すほどに欲が出て時間が足りなくなる。だが、どれだけ学生の希望に添えただろうか。

初回のアンケートで何人かが書いた「字が上手になりたい」の希望を5回の実習で叶えることはできなかった。だが、これからの人生の様々な機会に、筆があれば臆せず筆で行書の署名をしてもらいたい。今はまだ手本を見ながらのぎこちないサインも、「人書俱に老ゆ」の言葉を信ずるならば、やがて様になっていくだろうと期待する。

学生の願いを叶えたこともある。1年目の学生アンケートに「着物で授業をしてほしい」とあったのを受け、担当者2人は茶会に着物で指導し、3年間これを続けた。

茶会は両実習のまとめであるが、これをハレの場として設定し、少しばかりおしゃれをして全員がその演出に加わった。外部から数人のお客さんも参加していただいた。学生は、心持ち緊張する。その非日常の緊張の中で、署名し、揮ごうし、床の書を拝見する。自分の作品がハレの場の展覧に並ぶ。茶会は、「書」の実習のまとめとしても、有意義な設定であったと思う。

5回のテーマ選定時に悩んだ「比較文化方法論」にどれだけ迫れたかは、反省の他ない。速足の説明では理解が困難だったことだろう。だが、次のような学生の感想になぐさめられる思いだ。学生は書く。「書道の面白さというのは、理屈で感じるものではなく、何となく体で感じとるものだ」と今回の授業を通して思った。一文字いちもじ書いていくにつれ、まわりの音が聞こえなくなり、気付いたら数分たっているという体験をした。この高揚感というのは、理性では感じられるものではないと感じた次第です」

「比較文化方法論」とは、究極のところ、その後続く語「実習」にこそ重要な起点があるということなのだろう。



左から青山、諸泉、中山

(文中の写真の撮影および編集は人文学部4年生  
山口芳恵さんによる)

## 結び

中山 文

なんと贅沢な時間なんだろう。

初めてお茶会に出席した筆者は、その高雅な雰囲気息を飲んだ。いつもの教室の変貌ぶりに驚き、神妙な面持ちでお茶を淹れ、筆を持つ学生の凛々しさに目を細め、先生方のあでやかな和服姿に見惚れた。

特に、教室に運び込まれたお茶の道具の多さには圧倒された。すべて諸泉家の私物である。先生は毎週4時45分からの授業に午後早くから準備を始め、授業後も8時過ぎまで1人で片付けられるという。青山先生が持ち込まれる古い「文房四宝」の数々は、学生たちに「文雅」という言葉の意味を、形をもって教えてくれた。

書道も茶道も知らない不作法者は、文化の豊かさとは物質の豊さに裏付けられるものだという事に気づけなかった。それなのに厚かましくも、「うちの学生に、本物の書とお茶文化の喜びを教えてください」とお願いしたのである。この多彩なお道具こそが、茶文化・書文化の豊さを証明していたのだということ、本報告は再確認させてくれた。

無知な筆者のおかげで、学生たちはずいぶん得をした。この授業の受講生はほかのどんなカルチャースクールでも触れることのできない本物の品々を眼にし、手に触れ、味わった。彼らにとってどれほど貴重な経験であったことか。この贅沢な授業は大学生活の思い出としてずっと記憶に残るだろう。これからの人生を心豊かに生きていく、ひとつのきっかけとなったに違いない。

お2人の3年間のご教授に、心よりお礼を申し上げます。